

の延命中止報道

誤報と終末期議論の混迷

医学博士 長尾 和宏

世界が注目した米国の安楽死

今年7月、英国の乳児の安楽死が大きく報道された。深刻な難病で生命維持装置をつけていたチャーリー君（生後11カ月）の治療中止を巡って、世界的な議論になった。「ミトコンドリアDNA枯渇症候群」と診断されたチャーリー君は、内臓や筋肉、脳に深刻な損傷を負っていた。病院は「やるべき治療は総てやった」とし、両親に生命維持装置を外して安楽死を受け入れることを提案した。病院は裁判所に安楽死の許可を申請し、欧州人権裁判所は今年6月、「治療継続はさらなる苦しみを与える」として、これを認める決定を下し、チャーリー君を国外に渡航させることを禁じた。安楽死を認めていない英国においては異例の判断と言える。

一方、両親は「命が尽きるまで諦めない」と安楽死を拒否。米国の医師に相談したところ、欠如している物質の経口投与を約束されたという治療費や渡航費を募るため、両親はネットサイトを設置し130万ポンド（1億9000万円）以上の寄付を集めた。トランプ米大統領やバチ

カンも支援を表明したことで、さらに世界の関心が高まった。トランプ氏は「もし私達が助けることができたら喜んでそうしよう」とツイート。ホワイトハウスが両親と連絡を取った。

さらにフランシスコ・ローマ法王は、最期まで子供に寄り添い治療にあたるべきと主張し、バチカンが運営するローマの小児病院が受け入れを表明した。

しかし、英外相は裁判所の渡航禁止命令を理由に小児病院への転院を禁じた。最終的に米国の医師が脳のMRI画像を診て「時すでに遅し」と診断。「これ以上の治療継続は苦痛を長引かせるだけで尊厳を損なう」と判断された。両親はこの見解を受容し訴えを取り下げ、ホスピスに移った。チャーリー君は1歳の誕生日を目前に、呼吸器を外され亡くなった。

日本の各メディアもこの出来事を伝えた。しかし「安楽死」と報じたメディアと、「尊厳死」と報じたメディアが見事に混在していた。ある大手新聞は、本紙では「安楽死」、Web版では「尊厳死」と報じていた。同一新聞内でさえ用語が統一さ

れていなかった。

そもそも両者は異なるものである。「安楽死」は、余命がまだ半年以上ある人に医師が直接注射をしたり自殺薬を処方したりして人為的に寿命を短縮する行為で、日本では殺人罪である。一方、「尊厳死」とは。自然死・平穏死とはほぼ同義で、終末期と判断された人の延命治療を差し控えて、十分な緩和ケアを受けながら自然な経過に任せた最期である。法的にはグレーゾーンである。両者は明らかに異質であるのに、世間では混同され続けメディアでは誤報続きである。

3年前、米国オレゴン州の脳腫瘍の29歳女性が安楽死した時も、多くのマスコミは「尊厳死」と誤報し訂正はなかった。記者達に誤報の理由を聞いてみると、何人かは「自分が何を書いているかよく分からないまま書いた」と正直に打ち明けてくれた。また「独居でも自宅で尊厳死できる」で売っている論客が、ある言論誌では「尊厳死に断固反対する」と主張しているが、見事に自己矛盾している。多くの有識者達のコメントも拝読したが、尊厳死と安楽死の意味や違いを理解している人はごく



長尾和宏
(ながお かずひろ)

医療法人社団裕和会理事長、
長尾クリニック院長

1984年 東京医科大学卒業、大阪大学
第二内科入局、
1991年 医学博士（大阪大学）授与
1995年 兵庫県尼崎市で長尾クリニ
ックを開業、現在に至る
日本慢性期医療協会理事、日本ホスピ
ス在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協
会副理事長、全国在宅療養支援診療所
連絡会理事、関西国際大学客員教授
【医学博士】
日本消化器病学会専門医、日本消化器
内視鏡学会専門医、指導医、日本在宅
医学学会専門医、日本禁煙学会専門医、
日本内科学会認定医、労働衛生コンサ
ルタント
【著書】
『平穏死・10の条件』（ブックマン社）、
『抗がん剤・10のやめどき』（ブック
マン社）『胃ろうという選択』『がんの
選択』（セブン&アイ出版）『がんの
道』（小学館）『抗がん剤が効く人、効
かない人』（PHP研究所）『大病院信
仰、どこまで続けますか』（主婦の友社）
など。
医学書
スーパー総合医叢書・全10巻の総編集
（中山書店）第一巻『在宅医療のすべ
て』、第二巻『認知症医療』など多数。

英国の難病乳児 尊厳死・安楽死の

少数であった。

リビングウィル啓発を目的とする
日本尊厳死協会は、安楽死に反対し
ていることは、ほとんど知られてい
ない。国民皆保険制度が整備されて
いる我が国では、尊厳死が認められ
れば安楽死は不要という認識である。
しかし、安楽死団体と間違えて取材
に來られるメディアが後を絶たない。
先日、「安楽死法の制定を」と主張
する論客と対談をする機会があった。
その主張をよく聞いてみると、彼の
望みは安楽死ではなく尊厳死のこと
であった。このように混同が著しく、
そして、それが終末期議論が混迷す
る一因となっている。

有力な言論誌でもよく「安楽死や
尊厳死は……」という表記を見かけ

小児の終末期医療

が、意味が異なる言葉を用いてく
るにすることに違和感を覚える。生
命倫理を言語という道具を用いて論
じる限り、言葉はできるだけ正確に
使わないと議論が混乱するばかりだ。

以上の前提で英国の事例を振り返
ってみたい。あれはどちらなのかか。
両者の区別は死期が近いかどうか
ポイントとなる。尊厳死はリビング
ウィルと「不治かつ末期」が前提条
件となる。しかし、この赤ちゃんの
病は不治かもしれないが、当初は「末
期」とは言えなかった。だから両親
が米国医師の見解を受け入れるまで
は「安楽死」と表記されるべきであ
った。しかし、もはや死期が近いと

判断された時点から「尊厳死」の範
疇になり得た。つまり当初は「安楽
死」が正しく、「尊厳死」は間違い
であった。だが、「死期が近い」と
判断された時点からは「限りなく尊
厳死に近い安楽死」となった。

英国のようなケースは、英語では
「Death with dignity」と表記さ
れているはずだ。直訳すると「尊厳
ある死」となるのだろうが、日本語
の「尊厳死」ではなく「安楽死相当」
であることを知っておきたい。そし
てここに大混乱の源がある。英語で
の尊厳ある死は日本語での安楽死で
あり、英語での安楽死は日本語では
「殺人」であることを啓発したい。

さて、小児の在宅医療も国の重要
課題である。私自身も常に何人かの
小児も担当している。しかし、どん
どん元氣になっていく場合と、亡く
なっていく場合とがある。そして英
国と同様なケースもある。日本の場
合、多くは最期の最期まで闘ってい
る。しかし、いずれ日本でも英国と
同様の議論が起こるだろう。だから
今回のケースを高校や大学などで広
く議論すべきだろう。それが1歳の
誕生日を目前に旅立ったチャリー
君への供養になるのではないか。